

| | | | | | | | |
|-----|--------------|---------------|--------------------------------------|----|---|-----|-------|
| 専攻名 | 両専攻共通 | 必修・選択 | 選択 | 単位 | 2 | 学期 | 1Q |
| 科目群 | 事業アーキテクチャ科目群 | 科目名 (英文表記) | 事業アーキテクチャ特論 Business Architecture | | | 教員名 | 嶋津 恵子 |

| | | | | |
|----------------|---|-------------|----|--|
| 概要 | 各回の講師と講義テーマ及びその内容は、2019 年 3 月以降更新される場合があることに注意されたい。 特に今年度は、初回到産業界の構造変化の解説を行い 2 回目以降各産業界の動向の詳細を紹介する。 また、今年度は、日本文化継承事業と海洋開発の講師を招聘する。 掲載シラバスは、順次更新されることに注意されたい。 IT・マネジメントの活用、業務効率、課題等を俯瞰的に理解し、事例研究型科目（事業アーキテクチャ研究、事業アーキテクチャ設計）及び PBL 型科目（事業アーキテクチャ特別演習）での展開を図る。 講義は 2 コマ連続（90 分×2＝3 時間）で行い、講師による講演と、講演内容に関する担当教員による解説と議論を行い、理解が深まるように努める。 3 時間の内訳は、次の 2 パターンを標準とし、各講師の提案を基準に都度決定する。 パターンⅠ 約 15 分：前回講義の振り返り 約 100 分：講師による講演 約 65 分：質疑、議論、レポート課題の提示 パターンⅡ 約 15 分：前回講義の振り返り 約 60 分：講師による講演 約 20 分：質疑、グループ課題の提示 約 60 分：グループ討議 約 25 分：グループごとの発表と講師の講評と評価 | | | |
| 目的・狙い | 各次世代成長産業分野の識者に話を直接聞き、質疑・議論することにより、各分野の現状を理解することを目的とする。具体的には、以下の事項の理解・修得を目的とする。数年の業務を経験した者が最低到達レベル以上、10 年超経験したものが上位到達レベルに到達できることを目指す。 各分野の現状、業務効率・課題 IT・マネジメントの活用事例 関連する事項（新しい事業構築の提案等） 修得できる知識単位: （A2）K-07-17-04 システム活用促進・評価（レベル 4）情報リテラシ、データ活用、普及啓発等 （A2）K-08-20-02 技術開発計画（レベル 4）人材計画、技術ロードマップ等 （A2）K-08-21-01 ビジネスシステム（レベル 3）各種情報システム、電子政府等 （A2）K-08-21-02 エンジニアリングシステム（レベル 4）生産管理、MRP、PDM 等 （A2）K-08-21-03 e-ビジネス（レベル 3）EC、IC カード、ソーシャルメディア、ロングテール等 （A2）K-08-21-04 民生機器（レベル 4）AV 機器、家電機器、教育・娯楽機器等 （A2）K-08-21-05 産業機器（レベル 4）産業機器、医療機器等 （A2）K-10-24-01 顧客のビジネス知識（レベル 4） | | | |
| 前提知識 （履修条件） | 基本情報技術者試験レベルの知識があること（特に、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク等の基礎知識）。 情報システム等の関連業務に従事し、情報システム及び各種業務・事業に関しての基本知識があること。講義はある程度の専門知識があることを前提に話してもらう。 | | | |
| 到達目標 | 上位到達目標 | | | |
| | 各産業分野の現状・特徴をしっかりと理解し、潜在的課題を抽出できるレベル | | | |
| | 新しい技術を活用した世界市場を見据えた事業提案ができるレベル | | | |
| | 最低到達目標 | | | |
| | 各分野の現状、業務効率、課題等が理解できるレベル | | | |
| 授業の形態 | 形態 | | 実施 | 特徴・留意点 |
| | 録画・対面混合授業 | | — | |
| | 対面 授業 | 講義（双方向） | ○ | 出席前に、各講師が提示する予習を義務付ける。また受講時の積極的な質問等による授業参加を期待する。 |
| | | 実習・演習（個人） | — | |
| | | 実習・演習（グループ） | — | |
| | サテライト開講授業 | | — | |
| その他 | | — | | |
| 授業外の学習 | 各産業分野に関する事前の調査を目的とした予習を課す。また、提出が必須でない場合もレポートを自発的に作成し提出することを推奨する。 | | | |
| 授業の内容 | 計 7 名のゲスト講師に講演してもらう。各講師のテーマは、直前により相応しいものがある場合は変更することもある。各講演の内容に関する事前の予習結果提出と、授業中に提示される課題レポートもしくはグループワークと、最後の授業終了後にレポートあるいは試験を課す。 | | | |

| | 回数 | 内容 | サテライト 開講 | 対面/録画 |
|--------|--|---|-------------|-------|
| 授業の計画 | 第1回 | 第1回目・2回目 シラバス確認を中心とする本講座のオリエンテーション 授業進行方法、授業前、授業中、授業後のレポートの評価方法に関する説明。 【日本と世界の産業構造再編と今後の展望】 概要：日本の数少ないグローバル化成功とV字回復の覇者であった日産自動車のトラブルや、海外では、米中のIT業界の世界制覇の攻防など産業構造が大きく動こうとしている。産業構造の変遷を踏まえ、今後求められる取組施策、課題について、事例を中心に解説と考察する。 GFリサーチ合同会社 代表 泉田良輔 氏 | — | 対面 |
| | 第2回 | 講義の継続と提出レポート課題の説明 | — | 対面 |
| | 第3回 | 第3回目・第4回目【仮：日本文化は事業展開につながるのか】 概要：日本人が見逃している古来の文化や習慣が特に欧州の専門家に高く評価され、現地で事業展開される例を目にする。一方、国内では多くの日本文化は寺院仏閣など特別な環境を除き衰退の一途をたどっている。日本文化を産業化し発展につなげる方法を考察する。 庭師 村雨辰剛 氏 **この回に限り、講義形式ではなく、担当講師に対するインタビュー形式を採用する。 | — | 対面 |
| | 第4回 | 講義の継続とグループワークの実施 | — | 対面 |
| | 第5回 | 第5回・第6回【航空安全について考える】 概要：航空の安全は航空機の発達と共に著しく改善されてきましたが、依然として事故は起こり続けています。しかも近年の航空事故はシステムが安全性向上の為に高度化され複雑になってきているために、単にハードウェアやソフトウェアの改善では対応しきれなくなっています。そこで、航空機の発展と事故の歴史を俯瞰し、人とハードウェア、ソフトウェアの関わり方（ヒューマンファクター）について考え、航空安全の更なる向上に必要なものは何か皆で討議したいと思います。 エアバスジャパン株式会社 顧問 小林哲也 氏 | — | 対面 |
| | 第6回 | 講義の継続とグループワークの実施 | — | 対面 |
| | 第7回 | 第7回・第8回 5月11日（土曜日）【海洋立国日本における港湾・空港の現状と将来】 概要：建設業、特に海洋土木に焦点を当て、日本の発展における港湾・空港の重要性とその役割、そして現在の取り組みを紹介する。 東洋建設株式会社 土木事業本部機械部 課長 草刈成直 氏 | — | 対面 |
| | 第8回 | 講義の継続とグループワークの実施 | — | 対面 |
| | 第9回 | 第9回・第10回 5月18日（土曜日）【スポーツの成長産業化に向けた取組】 概要：2020東京オリンピック・パラリンピックを契機に、スポーツへの関心が高まっている。地域経済の好循環を実現するに当たり、スポーツコンテンツを地域資源と捉えた活用方法を考察する。 スポーツ庁 津々木 晶子 氏 | — | 対面 |
| | 第10回 | 講演の継続とグループワークの実施 | — | 対面 |
| | 第11回 | 第11回・第12回 5月25日（土曜日）【流通事業の現状と課題】 概要：「社会変化にともなう物流のパラダイムシフト」/「社会変化とロジスティックの変革」 流通経済大学 流通情報学部 教授 苦瀬博仁 氏 | — | 対面 |
| | 第12回 | 講義の継続とグループワークの実施 | — | 対面 |
| | 第13回 | 第13回・第14回 6月1日（土曜日）【仮：船舶業界の現状と課題】 概要：T. B. D. 横河電子機器株式会社 船用企画室長 家城竜也 氏 | — | 対面 |
| | 第14回 | 講演の継続と提出レポート課題の説明 | — | 対面 |
| | 第15回 | 6月8日〈総括等〉これまでの講義を振り返り、総括する。 | — | 対面 |
| | 試験 | ＜試験あるいは最終レポート＞ | — | 対面 |
| 成績評価 | 各回の対象領域の予習結果（5点×7回＝35点）、各回の講師が課す課題/グループワーク実施結果（5点×7回＝35点）、最終課題レポート（20点）、授業貢献・提出任意レポート（10点）とする。【レポート等の提出物は締切厳守のこと。】 特に、授業貢献・提出任意レポートに関し、授業中の議論の活性化や発展につながった場合や、講師の予定以上の成果創出となった場合、またレポートの内容が、次回の授業で履修生に紹介できるレベルであった場合に、加点する。尚、レポートの採点基準には、大学院生としての最低限の質（論理的展開等）を入れ、これらが満たない場合は、採点を行わないことがある。 | | | |
| 教科書・教材 | 事前にアップする各講師の資料 | | | |
| 参考図書 | 同上 | | | |